

別府と写真絵はがき

松田法子（京都市立大学）

絵はがきの別府

昨年『絵はがきの別府 -古城俊秀コレクションより-』（左右社）という本を出す機会に恵まれた。

別府は、近世以来の別府村・浜脇村などを母体として温泉関連業により明治期以降に大幅な拡大を遂げ、国内最大規模の温泉町になった。さきの本は、別府温泉を写した明治末期から昭和初期の写真絵はがきと別府の都市史に関するテキストから構成している。

本に載っている絵はがきは、大分市在住で元郵便局長の古城氏が約40年にわたって蒐集したものだ。はじめて見せて頂いた時の絵はがき群は、様々な内容と時代にわたる膨大な情報の切片だった。それらは何らかのかたちで〈別府〉に関係している、ということにつながり定められていた。わたしがまず関心をもったのは、これまでに氏が絵はがきを仕入れてきた市の場所だった。彼が赴く市は福岡など九州各地のほか、愛媛や大阪、京都だという。それは浴客や働き手、資本などの点で近代別府が結びついていた圏域そのものだった。

写真絵はがきと都市

仮に絵はがきを記念と記述、写真を記録と記号のメディアと捉えれば、写真絵はがきはこれら四つの性格を備えることになるだろう。写真絵はがきの面白いところは、マクロスケールからミクロスケールまで様々な空間の範囲が絵はがきという同じ一枚の寸法で切り取られていると

ころだ。私たちはそれらをあたかも同列であるかのように手にとって眺める。そのとき私たちの目は、巨視的・微視的なレンズを自動的に持ち合わせているといえるだろう。鳥瞰的な眼と虫瞰的な眼をあわせもつことは、都市史研究の経験とも似ている。

絵はがきに写るもの

さて本の冒頭に収録した絵はがき「豊後別府 的ヶ濱」には、つばめた和傘を差し掛けながら歩む三人の人物が点景として配されている（図1）。この構図からは歌川広重『東海道五十三次』の「蒲原」などがただちに想起され、江戸時代から続く伝統的な名所像が投影されていることに気づく。しかしこの的ヶ濱には「蒲原」のような雪も雨も降ってはいない。ここには発行元の「萩原号」あるいは写真師の演出による名所の光景が創り出されている。

的ヶ濱の内陸には海門寺という寺があり、一帯は墓地だった（図2）。そればかりでなく、ここには避病院（コレラなどの伝染病専門病院）や火葬場、と畜場が建てられていた。図1の写真絵はがき左端に写り込んでいる煙突は火葬場のものである。同時に浜は、さまざまな人たちの居住地でもあった。大正11年（1922）に、皇族の別府来訪にともなう的ヶ濱の松林にあった小屋を警察が焼き払うという事件が起きた。この一件から、的ヶ濱には80名もの人々が居住していたことがわかっている。赤十字社大支部総会に主席するために赤十字総裁の閑院宮が別府を訪問する計画がおこり、これに備えて別府署は小屋を焼き払ったのである。住人の一人であった浄土真宗の布教師である篠崎蓮乗が運動し、水平社結成のきっかけのひとつをつくったとされる。



図1. 絵はがき「豊後別府 的ヶ濱」（明治末期～大正中期）
（以下、掲載絵はがきはすべて古城俊秀氏所蔵）



図2. 絵はがき「別府海門寺の孤松」（明治末期～大正中期）

名所や観光地は、ある部分ではそれとして整えられ、つくりあげられていく性質をもっている。的ヶ浜は名所や観光地にかんする感性和政治の力学がせめぎ合う渚であった。写真絵はがきによって切り取られる的ヶ浜には写真師が心に描く名所のイメージが投影されているが、同時にその場面には場所に根ざす的ヶ浜の社会もまぎれなく写り込んだ。

絵はがきの製作発行者

明治から大正期、別府の写真絵はがきは主に別府の写真店や印刷所によって製作された。「萩原号」と「和田成美堂」が二大業者であり、どちらの店舗も「別府の浅草」の異名をもつ繁華な松原公園の近くに立地していた。

大正6年(1917)『大分県人名辞書』によれば萩原号の創業者は安政6年(1859)生まれの萩原定助であり、萩原は別府のみならず大分県下における絵はがき製造発行の創始者であるという。淡路島の南端にある福良町の出身で、元は干物商と質屋をなりわいにしてきた。明治31年(1898)か32年頃に別府へ移住し、絵はがきの発行をはじめている。萩原定助の名が記される出版物には、『十湯温泉案内』(明治42年)、『別府温泉誌』(大正元年)などが確認でき、絵はがきに加えて別府の案内本製作を手がけていたことがわかる。残された萩原自身の肖像写真は、がっしりした肩に眼光鋭く角張った顔をした和服姿の男で、われわれがつい抱きがちな感傷的で儂い「絵はがき」のイメージから遠い。絵はがきの印字からは萩原号・和田成美堂のほかにもかなりの発行所が確認でき、別府ではいったいどれだけの絵はがき発行者と写真師が活動していたのだろうかと考えさせられる。絵はがきの販売に携わった人も含めて、絵はがきで生計を立てていったものたちの裾野は広そ

うだ。絵はがきの売り場のひとつは有名な温泉浴場の前など、人の往来が多い路上であった。絵はがきを売る人物が写真絵はがきに写り込んでいることもある(図3)。

別府で写真絵はがきがつくられるようになったのは明治38年頃以降で、日本における写真絵はがきの創始期かつ黄金期であった日露戦争直後の時代を正確に追いかけている。のちに竹久夢二の妻となる岸他万喜が早稲田鶴巻町に絵はがき屋を開店したのは明治39年のことだった(細馬宏通『絵はがきの時代』青土社、2006年)。夢二は他万喜の店に自作の絵はがきを卸していた。絵はがき屋はさほど資本を要さず手軽にはじめられ、しかもその頃かなり繁昌が見込める商売だった。別府の写真絵はがきは、温泉町として急拡大していく別府に流れ込み、生計を立てようとする人々が手にした職の一端だった。

写真絵はがきによる〈別府〉史

写真絵はがきに切り取られた別府と、文献史料や地図史料などから再構成される別府とが同じ輪郭を描くことは決してない。そこからは絵はがきに写されたものと写されなかったものが、図と地のようにして浮かんでくる。写真絵はがきと文献史料はどちらも資史料として可能性と限界の双方を持ち合わせているわけだが、それぞれが描きだす〈別府〉の姿のズレにこそ、写真絵はがきが切り出す都市のかたちの特徴がみえてくるように思える。

別府の町にとって写真絵はがきとは、ありのままの別府の姿を伝えるものであった以外に、この都市が浴客を集めることで栄える温泉町である以上、町のイメージを伝えるという役回りを託されていた。風雅な雰囲気が重ねられる場所、繁華な賑わいが期待される町並み、浴場施設の壮麗さを喧伝する建築、市街の空撮によって別府の躍進を誇



図3. 写真絵はがきに写り込む絵はがき売り(明治末期～大正中期)



図4. 絵はがき(タイトルなし, 松屋別荘, 明治末期)

示する絵はがき。それらからは特定の場所や構図に込められた写真師や発行元の意図が感じられる。

しかし別府の写真絵はがきには、そのような目的だけに照らせばこんなものまでと思うような素材を取り上げたものも少なくない。なかには別府の住人が手に取ってこそ意味を発揮した絵はがきもあるように思える。写真絵はがきが切り取る別府の光景が紋切り型であったかといえ、決してそうではなかった。

蝶子と柳吉の世界

別府の写真絵はがきは、温泉町の威容や近代化を誇るような建築や町並みのほかに、一見ごく何でもない建物や町角も写されている点が魅力である。しかもそのバリエーションがひとかたではない。

あるひとつの旅館の建物について、わずかな時間差で別の写真絵はがきが作られていることも珍しくない。一軒の旅館の増改築状況が数年単位で追えることさえある(図4、図5)。ここで重要なのは、その旅館が別府において決して特別な建築だったのではなく、無数にあった旅館の一軒だということだ。その旅館の増改築の履歴が別府の町の近代史において重要な出来事であったとは思えない。しかしそれは紛れもなく、温泉町別府を下支えしてきた建物、商売、人の歴史である。その意味で別府の写真絵はがきは、この町の中核を支えた、無名の建物や人々の歴史へと向かう無数の入り口でもあろう。

ただそのなかでも注意しなければならないことがある。旅館を例にとれば写真絵はがきに写るそれは経営規模などの点において中間層以上のものだったといえる。昭和10年(1935)『温泉大鑑』に収録される旅館約250軒の規模と軒数を検討してみると、別府の旅館の8割5分以上は、取



図5. 絵はがき「別府海岸通り 旅館松屋別荘」(大正中期)

容人数が70人以下程度で客室は25室以下の中小旅館である。この規模の旅館の経営は短期間で移り変わっていることが多く、都市においてかなり流動的な存在であり史料上に追いかけていくことは難しい。写真絵はがきにもその姿が残されることはほとんどない。つまり写真絵はがきには旅館業の社会と空間における下部構造は写されていない。

大阪を舞台に描かれた織田作之助の小説『夫婦善哉』には続編がある。主人公の蝶子と柳吉は、景気がいい別府で一旗あげてことを夢見てこの町にやってきた。別府には、無名かつ無数の蝶子と柳吉が、活計のすべを探し求めて流転した末にたどりつき、ささやかな商売を興した姿があった。蝶子と柳吉には、織田作之助の次姉である山市千代とその夫の虎次という具体的なモデルがいる。千代・虎次夫妻は昭和9年(1934)に大阪から別府へやってきて中町(図6)で理髪・電気器具店を開き(蝶子と柳吉も同じ)、そのあと割烹「文楽」と旅館「文楽荘」などを営んだことがわかっている。千代と虎次、蝶子と柳吉が営んだような店の姿を写真絵はがきに見つけ出すことはかなり難しい。別府の写真絵はがきを眺めたときにその背後に広がる温泉町の分厚い下部構造あるいは一般構造を想像しなければ別府の見方は片手落ちであろう。写真絵はがきが切り取った膨大な数の〈別府〉像のほとんどは、この町をかたちづくる建築や社会の最上層部でも最下層部でもない、分厚い中層部だった。それが写真絵はがきの〈別府〉である。

「絵はがきの別府」展

本の刊行から半年ほど経った11月、別府駅にほど近い小さな近代建築を会場に「『絵はがきの別府』展」を開いた。会期は2週間限り、展示設計から設営まですべて手作り急ごしらえの展覧会だったが別府でつくられ各地へ飛



図6. 絵はがき「中町市街通り」(大正中期～末期)

び立っていった絵はがきを何らかのかたちで一度別府へ引き戻してみたかったのである。会場として貸して頂いたのは昭和初期築の草本商店という建物で、別府の絵はがきに個別にはほとんど写されなかった部類にあたる商店建築である。「三白」と呼ばれた砂糖や粉などの卸業を営む店で、白い外壁には黒いタイルで屋号と三白の品名が書き出されている。草本商店が建てられた昭和初期の別府とは二度の博覧会を開催するなど特に勢いがあつた時期で、写真絵はがきもたくさんつくられた。同店はいま広い国道沿いに店舗を移して営業されており、駅から海までの街区を構成する細い道「北浜通」に面するこの旧店は長年閉め切られていた。

絵はがき展の会期中には、同じとき大規模に開催中だった別府現代芸術祭からの若い来客のほか、本を携えて来てくださった絵はがきに写る旅館のご子孫たちをはじめ、

瀬戸内の諸港と別府とを行き来する関西汽船の元船員、戦後すぐに身一つで別府へ来て40年にわたり仲居などをつとめてきた女性（今は一人でおでん屋を営んでいる）、踊りの師匠だった男性、食堂をしていたが終戦直後には草本商店へ勤めていたという90代の男性など、実にさまざまな方が訪れてくれた。

古びた部屋の壁へ大きく引き延ばしてプロジェクションした写真絵はがきの画像は、80代から90代の来場者にとってさえ、それぞれの最も古い記憶より一世代かさらにそれ以上前の光景である。それでも絵はがきと自分自身が生きた〈別府〉とをつなぐ、わずかだが具体的な手掛かりは次々と見つけ出されて、会場には途切れることのない別府語りが紡がれていった。わたしはその瞬間瞬間に立ち現れてくる無数の〈別府〉に耳をそばだてるので精一杯だった。